

田山花袋

フロオベルと

ゴックール

フロオベルとゴンクール

人生と芸術家との間に起こる苦闘——それを私は最も明らかにギユスタフ・フロオベルに見た。彼は索莫たる五十八年を書斎に引き籠もって、重荷を負った競争者のように、辛い辛い努力にその日を送った。

彼は自ら声を挙げて、原稿を読んだという。調子の整うまでは、幾度も倦まずに文章を書更えたという。文句の組み合わせには殊に深く注意を払って、出来るだけ感じを現すことにつとめたという。かくして絶えざる労働

と、絶えざる煩悶と、絶えざる絶望とは常に続いた。

毎日十時間の労作、それが二十年と謂えば随分長い努力である。そしてその結果は僅かに四種の長編と三種の短編！

彼がある婦人に与えた手紙に、こういうことが書いてあつた。「我等芸術の憐れむべき労働者よ！　普通の人々にはしかく簡単に自由に与えられるものも、我等には何故に、容易に許されぬであろう！　それも理である。普通の人々は真心を持つ！　我等は遂にその真心の何物も

もたぬ。我等は到底理解されざる人間…… Gisette だ、
そして Troubadour の昔の夥伴の最後の生存者……」

普通の人は真心を持つ！ 我等は遂に真心の何物もも
たぬ。何等深き芸術の苦闘！ 私はフロオベルの矛盾と
寂寞と勤勉との意味をそこに発見したような気がした。
そして翻って考えた。真心の何物も持たざる所以は真心
の総てを持つ所以ではないか、と。

かれは恋を避け、世を避け、社会を憎み、道徳を憎み、
習俗を排して俗悪極まるものとした。かれは真心を持つ
ことさえも敢えてせぬ程に自由の翼を欲した。芸術の自

由の翼を得て自由に空を飛ぶことを欲した。

彼は望み通りに、自由に空を飛ぶことが出来た。けれどもその空は荒漠としていた。花もなかつた。樹もなかつた。かれの勤勉はその責縛を医すための勤勉であり、かれの努力はその単調を破るための努力であつた。理解されざる心、満され難き希望——その進んだ路は荒涼たるものであつた。

かれはその少年期をロマンチックスクールの全盛時代に過ごした。当時、習俗を排するの風が盛んであつた。

テオヒル・ゴオチエが赤短表衣を着て、態とらしい一種の調子のある演説をした。かれもその時代の感化を受けぬ訳には行かなかつた。広く縁取つた大きな帽子を冠り、恐ろしく広い、腰のあたりでぴたりと緊るような服を好んで着て歩いた。夏は一見トルコ人と見えるような上着を着た。

その少年時の思潮の影響は、かれの文章を見ればよく解つた。作品の背後にもその影響が明らかに指すことが出来る。否この情緒的感情と、医者の子としての科学的思想と、この二つが矛盾したままに発達して行つたと

ころに、実にフランス近代の文芸がその萌芽を生じたのである。

真心を持ちながら真心を持たぬという心、酔うを欲しながら酔う能わざる心、一生深く触れんがために一層深く離れたる心、憧憬と冷静、芸術と実際、そこに『マダムボワリー』の大作は生まれた。

エンマはかれの愛する児であつた。深く大いなる同情を持って、かれはこの人生の悲劇に対した。理想と實際の相違、一方の翼を美しい黄金の空に、一方の翼を汚く深い泥濘の波に、作者の心がその中間に漂って煩悶して

いたように、エンマも亦その間の細かい衝動を受けて悲劇を構成した。エンマは矢張り、*bourgeoisie* と相容れることの出来ぬ女性であった。簡単に普通の人間に許されるものに満足していることの出来ない女性であった。理解すべからざる心を持っていた。更に詳言すれば、矢張り *Troubadour* の夥伴の最後の生存者であった。

かれはエンマの最後を、冷ややかなる態度で立派に書いた。十三章の一章はフランス近代文芸の最もすぐれたる描写である。

Emma, her chin sunk on her breast; lag with open,

staring eyes.

沈黙の煩悶、秘密の煩悶、吾一人の煩悶、ここに悲劇の分子が最も多く存在する。沈黙と開放、秘密と暴露との間に薄い膜が一枚あるが、この膜はある時は微細なる音響の波動によつても破られるが、ある時は鋭利なる刀を以てしても猶且つ破ることが出来ないことがある。エソマの場合に於いても、作者自身の場合に於いても、その場合は後者であつた。

ブランデスは書いた。

「かれはクロアツセにかくれた。最後の作の不成功に

深く心を傷つけられて、全く寂寞の境に自己を閉じた。そして再び新に書こうと思ひ立つた。けれどもかれはもう老いた。旧友ジョウジ・サンド、テオヒル・ゴオチエを失い、幼稚朋友で思想上の朋輩なるブイユエ、ゴンクルを失った。かれは愈寂しくなった。健康も次第に悪くなった。散歩も不可能になり、——果ては他人の散歩を見るにさえ堪えぬような有様になった。それに財産もなくなつた。深切なその心柄から愛する一人の姪を信用して万般それに任せて置いた処が、その姪の夫がそれを全く使い果たして、後年には生活のたつきさえ心配しなけ

ればならぬようになった。次第に巴里に出て行くことなども少なくなり、果ては庭にさえ出なくなった。日常の動作は寢床から書斎におりおり歩いてゆくのと、さびしい食事に下階に下りて行くばかりになった。

「千八百八十年の五月に、かれは死んだ。墓はルーアンにある。葬式の列はさびしく、巴里から来た二三の友人が、かれをかれの最後の墓に送って行ったばかり、ルーアンの町からは殆ど見送りに立ったものはなかった。町でかれを知っているものは少なかった。知っている少数の人も、不健全な、不道德な作者として、常にかれを

憎んでいた。」

エンマは毒薬を仰いで死んだ。真心を持たぬ真心は眼を見開きながら驚く夫に護られて死んだ。理解せられざる作者の心も矢張りさびしい書齋の中で死んで行ってしまった。

フロオベルの作品は一篇毎に異なったりリズムがあり、異なったスタイルがあるという。文章はフランス文の中で、殊にすぐれていて、新しいフランスの散文の匂いはここから開けたとも言われている。「ベトオベン、オブ、

フレンチ、プローズ」と言われている。けれど私の胸に一番響くのは、矢張り理想と感情の衝突、憧憬と冷情との衝突、情緒的感情と科学的思想の衝突である。

メレジコウスキーは短い批評の中に、かれの手紙を材料にして、かれの心理を帰納的に評している。実際と芸術との触れ方離れ方について、フロオベルほど面白い意味ある生涯を送った人は少ないと私はそれを読んでつくづく思った。かれは實際を厭離した。通俗の思想を賤んだ。芸術にのみ価値ある世界があると思った。恋——最も価値ある意味ある恋愛そのものについてすら心を動か

さなかつた。一度、実際の泥濘の中に足を踏み入れたが最後、自己の芸術は汚れてしまふと思つていたらしい。かれの眼とかれの心とかれの感覚とは、実際の種々の穢れたものをそのままに写す研ぎすました鏡であつた。

この鏡を研ぐのに、かれは驚くべき意志の力と、讚歎すべき憧憬の念と、明快なる科学思想とをもつてした。

『サランボー』についての努力などは、今日考えて見ても、実に驚嘆に値する。歴史の古い黴臭い中から、あのような豊富な材料を蒐集して、それを現代的小説にしたのは、到底他の企て及ぶところではない。易きを捨てて

難きに就くとは実にかれの謂である。『サランボー』に於いても、『感情教育』に於いても、『サンアントアヌの誘惑』に於いても、『マダムボワリー』に由つて得たような喝采を博することは出来なかつたが、しかしかれの芸術的良心は決して衰えなかつた。

ブルジエはモウパッサンと比べて、フロオベルの競走者としての態度は、重荷を負つての競走で、モウパッサンのように自由でない、駆ける度にその重い足や身体やらが眼に立って見えるとここう評していた。この重荷？ この重く見ゆる足や体？ これは何であろうか。

私はこれは芸術の重荷であると思う。實際を離れて芸術に行けば行くほど、この重荷は段々重くなって、遂に全く自由を失って、身動きも出来なくなってしまうと思う。フロオベルは自由を求めて、實際から芸術に行った。けれど芸術に執着して、芸術の重荷の身に加わるのを知らなかった。『マダムボワリー』時代に新しかった衣が段々穢くなって行くのに気が付かなかった。

かれの晩年は芸術から實際へ立ち戻って来たような傾向である。芸術ではかれは遂に満足が出来ぬのを発見した。余りに離れた生活は遂に堪えられぬものであること

をかれは考えた。

けれどそれは余りに遅かった。

何故かれは『マダム、ボワリー』を繰り返して書かなかつたらうか。何故かれは自己の実際の研究をそのままに出さなかつたらうか。その晩年をエミール・ゾラは評して「この偉大なる勢力旺盛なる天才が段々古いミソロジの形を取って行くさまを見るのは実に悲しい。フロオベルは段々大理石像になって行く。」と言った。傷ましいこの大理石像！

かれは体格は大きく、音声は鐘の如く高く、威風堂々として、歩くさまから笑うさま語るさまに至るまで、常に一種すぐれたる莊嚴な相を持っていた。肉体の十分なる発達を遂げていたことは、写真を見てすぐ解った。この肉体から『マダム・ボワリー』『サランボー』などの大きな作品の出たのは意味がある。

ツルゲーネフとかれとを比較して見るのも興味のあることだ。ツルゲーネフはよく常に作中の人物に動かされた。勉強して平然たる態度を取っても、それでも猶その筆は主人公と共に泣いたり笑ったりした。ツルゲーネフの

作のパセチックであるということはその為である。フロオベルにはその憂いはなかった。かれは全く離れていた。

ゴンクールの日記をここに引く

三月二十八日——日曜日

今日われ等は出発した。ドオデエ、ゾラ、カルパンチエル、及び予。クロアツセに於けるフロオベルの家の晩餐会に赴かんが為に。今夜は一泊の予定。

モウパッサンはわれ等を迎えるべく馬車を飛ばして来た。フロオベルはクラブリア形の帽子に、丸いチョツ

キ、皺の寄ったズボンを着てにっこにっこして出て迎えた。屋敷は実際奇麗であつた。いまは分明と覚えて居らぬが、前にセイヌが美しく流れ、吾々は高い帆の影を、丁度舞台の後に行つたり来たりするのと同じように見ることが出来た。樹木は皆大きく高くその枝をひろげ、風が心地よくその間をふいて通つた。果樹も多かつた。それに眺望よき高楼、……

実際文人の理想的家屋であつた。

……

五月八日――

「貴郎は日曜日にフロオベルさんの処にお出かけになるでしよう？」とペラジューは言つて、「フロオベルが死んだ。」と唯一語書いてある電報を私に示した。私は驚き且つ惑つた。私は何を為しつつありや、何処に向かつて馬車を駆りつつあるかを知らぬくらいであつた。私は数週間前、別を告げた時に、涙がかれの睫毛を濡らしていたことを思い出して悲しくなつた。

五月十一日——

私は昨日ルーアンに向かつて立つた。

この朝ポウヘが家から出る時に、私に、「死んだのは

卒中ではなくツて、癩癩だったそうだ。若い時からその病があったと言うことは君も知っている。東洋に旅行してから、全く癒って、それから十六年一度も起こったことはなかったのだが、姪から受けた心配で、又不意にそれが起こったものと見える。日曜日に、不意に発作して、死んでしまったのだ。口に泡を出していたのがそのしるしだ。……………

ゴンクールの兄弟はフロオベルの昔からの親友であった。彼等はフロオベルと共に新しい文芸を祖述した。フ

ロオベルの『マダムボワリー』を説く人は『ゼルミニイラセルトウ』を必ず読まなければならぬ。

『ゼルミニイラセルトウ』は下婢の恋を描いたものである。その描写は外面描写を試みつつ、背後に暗い神経の動揺を写そうと企てた。

フロオベルの芸術に比べると、ゴンクールの芸術は余程プレーンである。全体の感じも重々しい暗い力が全身を圧するというよりも、針でさしたような神経の衝動を至る処に覚えると言う風である。描写の方法に至っても、前者のいかなる細かい所も写して残さざらんとするのに

引きかえ、後者は多い細かいスケッチの中から、時にエフェクティブな叙景、抒情、会話等を点出して来て、その全体の感じを顕そうとしている。前者は刷毛を以て塗抹を加えるのを辞さないが、後者はアツサリと簡単なる彩色で満足した。

事実を絶対に重んずるという傾向はゴンクールに至つて極まった。かれ等は事實に捉えられるという評を到る処で受けた。偏僻、零細、怪奇の非難をも少なからず被った。極端なる自然派の作者？ これはかれ等が二十二年間に羸ち得たる悪評である。フロオベルは、その豊富な

る想像を自由に使役して、事実と想像との縫い目つなぎ目を、手際よく解らぬように彌縫する手段を用いていたが、ゴンクールは全くその想像を捨てて、一に自己のスケッチに頼って小説を書いた。

「作者は唯作者の目撃したるもののみをよく描き能う。」

これがかれ等の主張であった。

従つて、かれ等は「刹那の現れ」に就いて、非常に注意を払った。想像で描いたコンポジションや舞台や会話や景色はすべてかれ等にあつては無意味で愚なること

で、瞬間に表われた人間の感情、行為、会話、——人間はそこにある、心理はそこにある、自然はそこにあると信じた。かれ等にとつては平凡なる一事象でも、その行為と空気とを描き得れば、それで立派な小説である。だから、フロオベルの芸術に要した想像は、ここでは取材の上に於いては用いられずに、材料をいかに紙に上するかの上に於いてのみ用いられる。

かれ等が文芸と写真術とを一緒にしたと言つて非難されるのもその為である。

その行き方は絵画に於ける外光派に甚だ似ていた。

外光派の画家は一枚の風景画を描くにしても、まずその地の気候、地質、空気等を十分に観察する。筆を下す時間に関して殊に重きを置く。十分の相違をも喧しく言う。決して一枚の画をその時書き上げるなどという空想的なことはしない。幾日でも同じ時刻、同じ天気の日を選んで出掛けて書く。

ゴンクールの叙述は総じてそうした行き方が多い。だから、『ゼルミニー』などにも田舎の有様を書いた短い筆の中に、非常にすぐれた叙述がある。貴族社会にしる、下等社会にしる、又は文人仲間の社交にしる、かれ等は

必ず手帳をその隠袋ポケツトから離したことなく、その印象の消え去らぬ間に、——丁度画家がスケッチをするように、その調子、会話、行為、空気を写生した。

そしてこの写生の堆積から一篇の小説をかれ等は常に作り上げた。

『セルベゼイ夫人』は肺病を病んだ宗教社会の婦人を描き、『ルネ・モウプラン』は甘やかして育てられた現代少女の心理状態を想像を用いずに事実によつて描き『ゼルミニーラセルトウ』は彼らの老従姉の家に雇われた下婢をモデルにした。

ではゴンクール兄弟は単なる写生、単なる外面描写のみであるかと言うのに、決してそうではない。矢張りフロオベルと同じく、初めはロマンチックスクールの感化を受けて、感情として歌う作者の群れの一であった。ハインを愛読したということでも略々その当時を推すことが出来る。殊に、弟ジュールは感情に富んでいたと伝えられた。

科学思想によって起こったフロオベルの反動よりも、一層極端に行つたのは、ゴンクール兄弟の反動であった。フロオベルは物の外部に留まって、深く内部まで入り得

なかつたに引きかえ、ゴンクールは常に極端に心理状態に進んで行つた。かれ等の執つたような外面描写で、そして心理に深く入ろうと企てたのは、まことに進んだ企てと言わなければならぬ。

ゴンクールは科学の精確に神経の衝動を加えて、自己の苦悶苦痛を常にその作の背景とした。かつて「われ等こそ神経を小説に用いたる最初の作者」と言つたが、それは決して意味の無い空しい誇ではなかつた。兄は胃病に苦しみ、弟は頭痛を持病にした。しかもその苦痛の中に孜孜として勉めて倦きなかつたのは、フロオベルの努

力と共に吾人の最も賛美する所である。

両者の文章、それを較べて見ても二人の特色が分かるという。フロオベルの文章は謹厳にして豊麗、調子が非常に好いのに引きかえ、ゴンクールのは、勉めてその冗句を去り、調子には余り重きを置かず、唯自己の必要と感じた処に向かつて、大膽に筆を着けている。コンベンシヨナルな処は少しもなく、句々皆生氣に富んでいる。ことにかれの用いた省略法は頗るその目的とした印象描写に適っていると称せられる。

『ラ、フォスタン』の後半部の叙述——女優がその恋

人と雑沓せる巴里の喧噪の中を去って、スイス瑞西の山中に静かに日を送るの条などは、頗る精彩に富んでいる。それから『アルマン』と称する一小短篇がある。矢張り女優の田舎行を書いたものであるが、平面に平気に叙した処に無限の味があつた。

ゴンクール（兄）はその著作のさまを語って言った。「私は午後二時頃からそろそろ考え始める。そして日の暮れる頃、丁度街灯の点される頃、往来の人の影が長く地上に曳く。——私はそれを見ようともせず歩いて行く。店にはやがて火の光が溢れるように漲り渡る。適

宜の運動と夕暮れの色とが力強く私の神経を打って頭脳が分明として来る。起こった考えを一々手帳につけて置いて、そして家に帰る。晚餐をすまして、その手帳に書いたものを整頓して寝に就く。私の一章を書くのは翌朝八時から十二時までの間である。」

フロオベルが死んでからは、ゴンクール（兄）が暫くフランス文壇の主人となっていたが、ゾラ、ドオデエ、モウパッサンなどが続々と踵を接して出て、遂にナチュラリズムの偉観を呈した。

ロマンチックスクール之感化を受けて、一面科学思想

の反動に胸を動かした二大小説家の姿を、私は時々想起す。……………

日本文学電子図書館

フロオベルとゴンクール

著 者：田山花袋

制作者：宮澤一郎

底 本：「花袋全集 第11巻」

花袋全集刊行会

大正12年7月20日 印刷

大正12年7月24日 発行

日本文学電子図書館